

学位審査報告書

| |
|-----|
| 新制 |
| 人 |
| 105 |
| |

| | |
|--|--|
| （ふりがな） 氏名 | リ ジェホ 李 在鎬 |
| 学位（専攻分野） | 博士（人間・環境学） |
| 学位記番号 | 人博 第 425 号 |
| 学位授与の日付 | 平成20年7月23日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 |
| 研究科・専攻 | 人間・環境学研究科 人間・環境学専攻 |
| (学位論文題目) <p style="text-align: center;">用法基盤モデルに基づく日本語の構文研究</p> | |
| 論文調査委員 | 主査 教授 山梨 正明 副査 教授 服部 文昭 副査 教授 大木 充 |

(論文内容の要旨)

本論文は、認知言語学の枠組みに基づき、日本語の構文現象の解明を試みた理論的・実証的研究である。全体は8章から成る。

第1章では、認知言語学のパラダイムに基づく用法基盤モデルの視点から、これまでの理論言語学の研究の背景となっている文法研究の批判的な検討がなされる。

第2章では、まず認知言語学の分析モデルの代案として重要な役割をになう構文文法と認知文法の成立の背景を歴史的に概観し、構文現象の分析におけるこれらの文法モデルの理論的な位置づけを試みている。次に、以上の文法モデルと本研究の理論的・方法論的背景になる認知言語学の用法基盤モデルの位置づけを明らかにしている。具体的には、(i)用法基盤モデルが、言語の使用態に対する体系的・実証的なモデルであり、(ii)構文文法と認知文法の経験的な基盤となる言語研究の枠組みとして、統語論と意味論の双方の観点から、日常言語の構文現象を体系的に捉えていく視点を明らかにしている。

第3章では、第2章の理論的背景を踏まえ、本論文が提案する新たな分析の枠組みを提示している。特に本章では、構文文法と認知文法の統合に基づき、コーパス利用のデータ収集法と統計的手法を導入し、構文現象の一般的な記述と説明を試みている。構文文法と認知文法の統合を図る根拠としては、いずれの理論も方法論的な互換性を持っている点が挙げられる。また、本章では、この二つの文法モデルは、(i)非還元主義に基づく分析モデルとして相互のモデルに対する補強を可能にし、(ii)コーパス分析の視点の導入により観察記述の基盤を強化し、理論的にも実証的にも妥当な構文研究を可能にする点を明らかにしている。

第4章では、日本語の構文現象の具体的な考察を行っている。特に本章では、「XガYニVする」形式の構文現象を分析の対象とし、このタイプの構文に生起する動詞自体の内在的意味だけでなく、この種の構文パターンがになうゲシュタルト的な意味機能を考慮しない限り、「XガYニVする」形式の構文の表層の分布関係に関する適切な一般化が不可能な点を明らかにしている。また本章では、この種の問題は、以上の構文タイプの現象だけでなく、日本語の自動詞構文、他動詞構文において観察される一般的現象であることを示すため、事態認知の自動性と他動性にかかわる広範な構文の事例を分析している。その結果として、同じ動詞が生起する構文でも、その構文における動詞と共起する名詞の意味フレームの変容によって、構文全体の意味に質的な変化がみられる事実を明らかにしている。

第5章では、第4章で明らかになった構文現象に関する事実、すなわち同じ動詞を使った表現でも（これと共起する）名詞の意味フレームにより構文自体の意味が変容する事実を、アンケート調査に基づく実験的手法で検証している。その手順と

して、寺村(1982)の構文現象に関するデータを分析し、この分析によって得られたデータに対する多変量解析を行っている。その結果、先行研究における「XガYニVする」形式の構文の分類と一般化は、動詞の内在的な意味自体にかかわる自動性と他動性の特徴だけを構文分類の基準とするため、構文自体の意味規定に本質的に限界がある点を明らかにしている。

第6章では、第4章と第5章の結果を踏まえ、生成言語学系と認知言語学系の構文現象の先行研究に対する問題提起を行っている。先行研究としては、(i)語彙主義による分析の問題点と(ii)構文文法による分析の問題点を指摘している。(i)の研究として、Jackendoff(1983)やLevin and Rappaport(1988)の語彙概念意味論の枠組みに基づく影山(1996)、影山・由本(1997)、等の日本語の構文分析を批判的に検討している。具体的には移動構文に関する問題を取り上げ、構文の選択が動詞の内在的な意味から一義的に決まるとする語彙分析の限界を明らかにしている。次に、(ii)に関する研究として、Goldberg(1995)の構文文法を起点とする李(2002a, 2002b, 2003b)、伊藤(2005)、永田(2006)の日本語の構文分析を批判的に検討している。(ii)の線にそった構文分析では、構文における格パターンに、文の構成要素に還元できないゲシュタルト的な意味が存在する事実を明らかにした点は重要である。しかし、一方の問題点として、この種の構文の意味が、問題の構文のどの言語的特性に起因するかが明らかにされていない。本章では、この構文自体の意味に対する十分な根拠が示されていない点が指摘されている。

第7章では、第6章で問題提起した構文の格パターンに関する用法基盤モデルに基づく分析を行っている。特に第6章で明らかにした先行研究の問題点を踏まえ、構文の構成要素としての名詞の意味フレームと格パターンの分析の必要性を指摘し、コーパスデータの実験的手法による分析を行っている。具体的には、読売新聞の11年間分のコーパスデータ、等から「XガYニVする」構文にかかわる名詞の意味フレームと格パターンを抽出し、複数の母語話者によるこのタイプの構文のスキーマ的な意味の調査を試みている。そして、名詞の意味フレームと格パターンにかかわる意味を電子化されたシソーラスで特定し、この種の意味から構文全体の意味を予測する統計的分析を行っている。この分析により、名詞の意味フレームと格関係の知識が構文のゲシュタルト的な意味に与える影響の強さを測定し、本研究のこれまでの主張(すなわち、構文の意味の決定に名詞の意味フレームと格パターンの意味が重要な役割を担っているという主張)の妥当性を明らかにしている。

第8章では、理論面・実証面の双方の観点からみた構文研究における本研究の意義と展望が論じられている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、認知言語学の用法基盤モデルに基づく日常言語における構文のメカニズムの理論的・実証的研究である。従来の理論言語学の構文研究では、動詞の内在的意味が文の中心であり、個々の構文の意味と構文間の表層分布は、語彙レベルにおける動詞の概念構造によって一般的に規定するアプローチが前提とされている。この動詞を中心とする語彙主義的アプローチでは、概念構造に基づく動詞の意味機能と項構造の統語的パターンの解明を試みている。

これに対し、本研究は、以上の語彙主義的アプローチの本質的な問題として、次の二点を明らかにしている：(i) 語彙主義的アプローチでは、(意味関数に基づく概念構造の規定から明らかのように) 構文の意味を動詞と項構造に基づく構成的な意味として要素還元的に捉えており、文の構成性原理からは予測できない構文それ自体のゲシュタルト的な意味に関しては適切な説明ができない。(ii) このアプローチは、動詞の意味を中心に文の意味を予測するとしながらも、動詞の意味の規定に際し、項構造によって規定される文のフレームレベルの意味から動詞の意味を決定するという方法論的循環がみられる。この二点は、従来の語彙主義的アプローチの分析モデルに内在する本質的な問題である。

これに対し、本研究では、動詞にかかわる意味要因だけでなく、名詞の意味フレームと格パターンにかかわる意味要因に着目し、個々の構文の意味機能と構文間の表層分布に関する実証的な分析を行っている。本研究は、この分析のための方法に関しても、次の点で独創的と言える。本研究では、従来の分析者の直観に基づく作例を中心とするアプローチに対し、広範な構文現象にかかわるコーパスに基づいて具体事例を統計的手法で分析し、実証的言語研究の方法論を提示している。さらに、本研究は、この方法論を認知言語学の用法基盤モデルに適用することにより、今後の構文研究に対する新たな方向性を示している。

語彙主義的アプローチに基づく文法研究の基本的な考え方は、構文現象は、動詞の下位範疇化の結果であり、動詞の意味から構文の可能な分布関係を予測することができる点にある。また、この前提のもとに、動詞は文の中核に位置し文の中心的意味を規定し、構文の表層パターンは単なる随伴現象であるに過ぎないとしている。これに対し、本研究では、用法基盤モデルの観点から構文文法と認知文法を統合する新たな分析モデルを提示し、構文自体のゲシュタルト的な意味と表層レベルにおける構文の分布関係を体系的に明らかにしている。特に従来の方法では一貫した分析が難しいとされる名詞の意味フレームと格パターンの関係を、電子化されたシソーラスの広範な言語データを用いることにより体系的に規定している。また、以上の言語データを統計的手法で分析し評価することにより、構成性原理によ

| | |
|----|------|
| 氏名 | 李 在鎬 |
|----|------|

って予測可能な構文の要素還元的な意味だけでなく、構文自体の意味パターンに関する新たな定式化を行っている。

さらに本論文の独創的な点は、方法論的精緻化がまだ十分とは言えない用法基盤モデルに対する実践的な方法論を具体的に示している点にある。認知言語学をはじめとする従来の構文研究では、分析者の直観に基づいて用例を作成し、同時に評価を行うという方法が採用されている。しかし、この方法は、科学的研究の方法としては問題があると言わねばならない。こうした現状に対して、本研究は、実際の使用例に対し体系的・網羅的な事例収集と観察を行い、客観的な判断基準となる統計的な方法と指標を提示し、科学的な言語研究の方法論を提示している。この方法論は、言語現象の分析一般に適用可能であり、言語のメカニズムを検証する上で重要な意味を持つと言える。

言語学における記述と説明の妥当性の観点からみた場合、本研究は、次の点で従来の理論言語学における構文研究に比べ、より体系的な説明を可能にする。従来の研究では、動詞を中心とする語彙の意味的制約に基づく分析が大半を占め、動詞の意味的な制約から説明できない現象に関しては、語用論的な要因にゆだねる例外処理の扱いをしている。それに対して、本研究では、名詞の意味フレームと格パターンの分布関係を、構文の事態認知にかかわる語用論的な要因を組み込むシソーラスの定量的な評価手法に基づいて体系的に分析している。

本研究は、主に日本語の現象を対象にし、共時的な視点からみた構文研究を主眼としており、日常言語の通時的な視点からの構文分析の適用はなされていない。しかし、本研究の共時的な視点からの構文研究を進めていくなれば、構文レベルにおける意味の変容プロセスによって特徴づけられる通時的な意味変化の一面を、より体系的に分析していくことが可能となる。この点で、本研究は、日常言語の意味変化の背景となる記号の創発のメカニズムを一般的に解明していくための基礎研究としても注目される。

本申請者が所属する環境情報認知論講座の目的の一つは、言語、知覚、思考、推論、等にかかわる人間の知のメカニズムの解明にあるが、本研究は、この目的に沿った基礎的研究として高く評価できると共に、今後の言語学と認知科学の関連分野への貢献がさらに期待される。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成20年6月17日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。